

【書評】

神奈川大学人文学研究所編 御茶ノ水書房

『新しい文化の形——言語・思想・くらし』

村田 年 (和洋女子大学)

本書は、狭い意味での言語文化の比較の枠を超えて、様々な「文化のかたち」を詳細に追求することによって「新たな」く文化の形を見極めようとする試みと見受けられる。人文学のパラエティーに富んだ論文を収容しているが、単なる人文学の論文集ではなく、「言語・思想・くらし」の3本の柱の下に見事に集約し、新しい文化の形を追求する論考の出発点として強いインパクトを与え、今後の研究の活性化に貢献すると評価できるものである。

評者の専攻する日英の言語文化比較の観点から少し詳しく見てみたい。

第1部「言語と文化のかたち」について。「日英の言語文化のかたち」は、先行文献の多い、この分野の鳥瞰図を簡潔に、しかも具体的に示し、日英語の比較研究の活性化に力を貸すものと期待される。各章の論考は定説とも見なされるが、例えば、文法形式と文化の形がこのように結びつくか?と一度は疑問を呈することによって、今後の研究の進展が期待できよう。次に日英会話辞書を扱った論文は、江戸時代末期から明治初めにかけての日本語のスピーチ・レベルを3つに分けて示し、それぞれに英訳をつけた辞書の紹介の意義は大きいと思われる。ロシア語教育の形を論じた論文は、日本人にとって難しいと考えられているロシア語へ、言語の形の違いから、また文化の違いからうまく導入する方法を、実感の伴った筆者の経験を交えて論じ、共感を呼ぶものである。

第2部「思想と文化のかたち」について。インドの文化のかたちの論文は、ヨーロッパの文化の形に比して、『マヌ法典』に基づく古典期インドの人生の4つの段階を通して、この世及びあの世における幸福がどのように与えられるかを詳述し、見事にインド文化の本質を浮かび上がらせている。トルストイとマーク・トウェインの論文は、「良心」の意味が極端に異なる二人の作家が実は大きな観点、ヒューマニズム精神という点で共通していたことを突き止める過程を詳述している。創造力を働かせての力強い探求態度は文化研究のひとつのあり方を示していると言えよう。近代ロシア思想における文化の形を扱った論文は、私の理解能力を超えるものではあるが、文化の相違の本質の不確かさ故にこれを論じることの難しさ、論者における創造力の必要性を感じさせてくれる。

第3部「くらしと文化のかたち」について。マオリ文化のかたちの論文は、一般にはパゲハ(ヨーロッパ系ニュージーランド人)の文化とマオリ文化の相違点に注目するが、ここではついには両者の区別を超えた文化の共有化を見出すところまで論を進めている。他の2つの論文、歌舞伎の家と家紋、及び日本文化の「斜め嫌い」再考はともに日本文化の特質の一端を突いている。前者において、紋章は現代のわれわれの想像を超えて役者の分身とも言えるものと理解できるが、さらにヨーロッパなど他の文化における紋章との相違点などに目を向ける発展性が期待できよ

う。後者の「斜め嫌い」もさらに多くの研究分野に当てはめて、その意義を考察できる良いテーマであると思う。

さて、この論集の意義について一考してみたい。特に人文学は共同研究が比較的少なく、それぞれの研究者が独自の手法で研究を進めることが多く、他を模倣しない、自分の独自性を出すことに努める。結果、論文を集めても一貫性を持たせることは困難である。本書のようにある枠を決めて書き、お互いに読み合うことによって、次の機会には自分の研究の枠組みを拡大したり、修正したり、単独では考察することはなかった分野に手を染めたりすることが考えられる。これを進めれば、比較文化のある枠組みへと収斂する大きな意義が考えられる。本書を人文科学から比較文化研究の基本図書として広く推薦したい。